おしゃべりコーナー

（目次）

＜今月の歌＞
「さくらんぼの実る頃」　（竹の台・Heidi）

＜ショート・ショート＞
「心と身体」　（春日台・大西　No.8）

＜9 条街角ギャラリー＞
「新緑」　（竹の台・タイガー）

＜今月の歌＞

「さくらんぼの実る頃」 うた：加藤登紀子

作詞：J.B.クレマン、日本語訳：加藤登紀子、作曲：A.ルナール,

https://youtu.be/bLXY4WM7WVg?si=DD2MQvOuOM2ewEG2

さくらんぼを一緒に摘んだ淡い恋心の美しいメロディーからは想像もできないけど、1871 年、フランス人にとっては労働者が初めて革命政府を樹立したパリ・コミューンの歌として知られています。

宮崎駿がファシスト時代のイタリアを描いた「紅の豚」でも、加藤登紀子にフランス語で歌わせており、宮崎駿の想いが伝わります。

作詞はコミューンの一員であったジャン＝バティスト・クレマンで、必死に負傷者の手当てをし、「血の一週間」にヴェルサイユ軍に惨殺された看護師ルイーズに捧げられました。２年後、テナー歌手のアントワーヌ・ルナールが作曲、虐殺を悼む参加者への追悼の歌としてパリ市民に歌い継がれ、２０世紀に入っても、イヴ・モンタンやジュリエット・グレコなど多くの歌手がカバーしています。

♪さくらんぼ実る頃
　鳥たちは浮かれて歌うよ
　誰かに恋して
　愛する人の
　腕に抱かれて
　うれしさにふるえてた
　君は赤く頬を染めて
　いつもよりずっときれいだよ

♪さくらんぼの耳飾り
　燃える耳に飾る頃
　どこかで聞こえる
　手をつないで
　歩く二人によく似た
　さくらんぼの赤い実が
　小道のそばで木の陰に
　しずくのように落ちる音

♪恋の終りを恐れるなら
　さくらんぼの赤い実を
　愛してはいけない
　あふれるよろこびが
　いつかきっと
　苦しみに変わるころ
　愛をうたった鳥は去り
　季節の終りを告げていく

♪さくらんぼ実る頃
　心は今もゆれている
　あの日と同じように
　傷ついたまま
　消えない思い出
　胸の奥でふるえてる
　どんなに時が過ぎても
　あの日の恋を忘れない

　さくらんぼ実る頃　ムムム……

（Heidi）

目次へ

＜ショート・ショート＞　　ちょっとした気づきやつぶやき・・・

「心と身体」

人生の半分は働いていた。
なにかを追いかけていたのか
なにかに追いかけられていたのか、
心忙しくしてきた。

もう死ぬかと思ったことや
地震にもあったが、
働いていた頃は心が身体を
ずっーと引張っている気がしていた。

だが振り返れば身体は、
自身のことをほとんど語らなかったけれど
忙しい心を支えてきたのだ。

そして老年になってやっと
心が少し穏やかになった頃、
身体はもう悲鳴をあげるばかりとなった。

春日台・大西　NO.8

目次へ

＜9 条街角ギャラリー＞

「新緑」

日に日に、若葉が芽吹き、目を楽しませてくれる季節になってきました。何という心地よさでしょう！
人の目の感度が緑色で最大になっているのも頷けます。

植物は決して自慢はしないけれど、若葉は成長過程で大気中の CO_2 を吸収して、おまけに酸素を放出してくれています。この光合成という不思議なプロセスは、実はまだ全容が解明できていないそうです。

一方、秋になると、大方の葉っぱは落葉します。そして、プラスチックのように片意地を張らずに、自分から朽ちて土に戻ります。そうすることで、元々、大気中にあった CO_2 が大地に閉じ込められ、カーボン・ニュートラルに貢献してくれる訳ですね。

だから、落ち葉を集めて燃えるゴミに出すなどは、折角固定された CO_2 が焼却されて再び大気に戻るので、植物の努力を無に帰す薄情な行為になります。

一方、大地に閉じ込められた CO_2 は長い年月を経て石炭などになりますが、それをまたほじくり返して、燃やしてエネルギー源に使うのは、さらに植物の恩を仇で返す行為かも知れません。

人は賢そうだけど、実は植物よりバカなのかも・・・

（竹の台・タイガー）

目次へ